N13a Differences of Magnitude in Star Catalogs

藤原智子（京都産業大理）

Johannes Bayer は 1603 年「Uranometria」の中で 60 の星座（北天の 48 星座＋南天の 12 星座）を 51 の星図の中に描き、世に発表した。この時 Bayer は各星座の星を光度の強い順に、$\alpha, \beta, \gamma, \cdots, \omega$,a,b,c,$\cdots$とギリシア文字の小文字とアルファベットの小文字で記号を付けた（Bayer 記号）。これは後の天文学に大きく寄与し、現在でもなお使われ続けている。しかし、これらの Bayer 記号は、実視等級に対応していない部分も多く、完全に光度順に付けられている訳ではない事に気付く。これには主として以下の原因が考えられる。

1. 星の光度は Bayer 自身が直接観測した結果からではなく、Ptolemy（L.Claudius Ptolemaeus）の「Almagest」（120 年）に記されている星表に追随し、星表の誤りをそのまま参考にして Bayer 記号を付けた為。
2. 星が著しく増光又は減光（変光）し、現在の光度が当時の光度から変化している為。
3. 何らかの理由により、星座によっては “明るい星順に記号を付ける” という原則が崩された為。

Al-Bīrūnīは「Al-Qānūn al-Mas‘ūdī」（1030 年）の中で既に「Almagest」と Aṣ-Ṣūfīの「Suwar al-Kawākib」（986 年）に記録されている各星の等級の違いを述べているが、今回の発表では、これらの等級の違いと Bayer 記号、現在の実視等級を辿り、その等級の変化について報告する。